ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史的変遷（1）

下嵜　正利

本稿では，ゲルマン語強変化動詞第2種につき，各言語における語幹形成と語彙の変遷を辿ってみたい。強変化動詞の語幹形成と語彙の変遷は，言語により多様な様相を示すが，第2種の動詞に対象を絞った上で各言語を比較し，現在見られる言語間の相違がいかなる過程を経て生じたか，各言語がいかなる特徴を持つに至ったかを見ていきたい。

強変化動詞の語幹形成及び語彙の変遷は，基本的には分散的な発展である。そこでまず，ゲルマン祖語から各言語の文献時代の初期までで，強変化動詞第2種の語幹形成法がどれだけ変化したか，各言語の文献時代の初期において，どの動詞が強変化第2種に属していたかを見，この段階ですでにどの程度言語間で相違が見られるかを示す。その後，各言語の文献時代初期から現代までの発展を見ていくことにする。文献時代初期の記述の際，取り上げる言語は，ゴート語，古アイスランド語，古スウェーデン語，古高ドイツ語，古ザクセン語，古英語，古フリジア語とする。古アイスランド語と古ノルウェー語は差異がほとんど無いので，古西ノルド語は古アイスランド語で代表させる。古東ノルド語については，古スウェーデン語と古デンマーク語の差がさほど大きくないことに加え，古デンマーク語の資料上の制約の問題もあるので，古スウェーデン語で代表させる。古期オランダ語も資料上の制約のため，文献時代初期に関する記述の中で単独では扱わず，中期オランダ語以降の発展を記述する中で，必要なことがあれば触れるにとどめることとする。

1.0. ゲルマン祖語，文献時代以前の北・西ゲルマン語

ゲルマン祖語における強変化動詞第2種のアプラウトは，標準階梯の現在語幹を持つ場合，eu – au – u – u（現在語幹―過去単数語幹―過去複数語幹―過去分詞の語幹の順）である。これは起源的には，アプラウトを行うeの後にŭが続いたものであり，インド・ヨーロッパ祖語のe – o – 0 – 0というアプラウトをそのまま引き継いだものである。

アオリスト現在形を持つ場合，現在語幹の幹母音は，本来現れるはずのuではなく，ūである。短母音ではなく長母音が現れていることについては諸説あり，はっきりしたことは分からない[1]。強変化動詞第2種の中には，言語により

[1] たとえば，Hirt（1932），§133; Campbell（2003［[3]1968］），§736,（b）は，強変化動詞第1種への類推（ī : ai : i = X : au: u　X=ū）としている。Kuryłowicz（1969）は，強変化第3種・第4種で成節的子音が幹母音の前にあるタイプの動詞への類推で，成節的子音が同じく幹母音の前にあるアオリスト現在形を持つ強変化動詞第2種において，uがūになった（(-)ReT : (-)Rut = (-)Reŭt : (-)RuŭT（= -RūT）（Rは成節的子音，Tは子音））としている。

標準階梯の現在語幹を持ったりアオリスト現在形を持ったりするものや，同一言語内で両方の語幹を持つものがある。そうした動詞については，右肩に # を付して示すことにする。

ゲルマン祖語において，文法的交替は，現在語幹が無声摩擦音で終わっている場合，規則的に起こった。すなわち，現在語幹と過去単数語幹では無声摩擦音，過去複数語幹と過去分詞の語幹では有声摩擦音が現れた。語幹を構成する子音に関してはその外，語幹頭子音や語幹末子音が後続母音の影響を受け変化することもなかった。

北・西ゲルマン語では，germ. u は[2]，次音節の母音が a だと o へと変化する（a-ウムラウト）。この変化は，過去分詞の幹母音に関わってくる。現在語幹の幹母音として現れる germ. eu も，次音節の音の影響により変化する。これには言語により若干差異があったようであるが，次音節の前舌高母音及び j の影響による iu への変化は，すべての北・西ゲルマン語に共通して見られる。

i-ウムラウトも，北・西ゲルマン語に共通して見られる現象であるが，強変化動詞第2種の語幹形成において i-ウムラウトがどのように関与してくるかは，言語により相違が見られる。なお，上述の eu から iu への変化も i-ウムラウトと呼ばれることがあるが，本稿では i-ウムラウトと言った場合，この音変化は含まないこととする。

1.1. ゴート語

germ. eu は，ゴート語では iu になる。germ. au は，áu になる。germ. u は，h, hʋ, r の前では aú に，その他の音環境では u のまま保持される。これらの音変化により，標準階梯の現在語幹を持つ強変化動詞第2種で語幹が h で終わっていないものは iu – áu – u – u，語幹が h で終わっているものは iu – áu – aú – aú というアプラウトになる[3]。

iu – áu – u – u というアプラウトを行う動詞には，次のものがある[4]。

-biudan, biugan#, driugan, driusan, giutan, hiufan, -hniupan, kiusan, kriustan, liudan, liugan, -liusan, niutan, siukan, -skiuban#, sliupan#, -þriutan

iu – áu – aú – aú というアプラウトを行うのは，þliuhan と tiuhan の2語のみである。

アオリスト現在形を持つ動詞は，lūkan（schließen）のみであり，ū – áu – u – u というアプラウトを行う。

---

[2] 特に断っていない限り，母音の変化はアクセントの有る音節におけるものとする。
[3] 語幹が hʋ, r に終わる強変化動詞第2種は存在していない。
[4] ゲルマン祖語の形のアルファベット順で配列している。以下同様。

germ. *blewwan は，Holtzmann の法則により bliggwan となり，強変化第3種へと移行している。

文法的交替は，すべて無声摩擦音の方に統一する形で排除されている。

1.2. 古アイスランド語

germ. eu は，ノルド祖語において，次音節に前舌高母音あるいは j がある時，iu になった。ノルド祖語においては，eu と iu の分布は次音節の音によっていたが，古アイスランド語では，eu からの発展形である ió と iu からの発展形である iú の分布は，後続子音に応じたものへと変化し，ió は歯音の前，iú は唇音と軟口蓋音の前という形になる[5]。

直説法現在2人称・3人称単数形では，i-ウムラウトにより標準階梯の現在語幹を持つ動詞もアオリスト現在形を持つ動詞も幹母音が ý となり[6]，この ý は直説法現在1人称単数形にも入り込む。その結果，直説法現在単数形の幹母音はすべての人称で ý となる。直説法現在2人称複数形では，語尾が -ið であるにもかかわらず i-ウムラウトが見られず，そのため直説法現在複数形の幹母音はすべての人称において不定詞の幹母音と同一となる。

germ. h 及び germ. g が語末で無声化し生じた h の前では，germ. au は ó になる。この変化の後，h は脱落する。germ. u は，R-ウムラウトを受けると ø になる。接続法過去形では，i-ウムラウトにより u が y になる。

過去分詞の幹母音は，R-ウムラウトを受けていない限り，a-ウムラウトを受けた o であるが，接尾辞は -an- ではなく -in- である。すなわち，古アイスランド語の強変化動詞の過去分詞は，-an- という接尾辞を持った形態と -in- という接尾辞を持った形態の混淆形態である。これは他の北ゲルマン語でも同様である。

古アイスランド語において，語幹が ð, t に終わる動詞のアプラウトは ió（ý）– au – u – o（かっこ内は直説法現在単数形の幹母音）となる。具体的には次の動詞である[7]。

---

[5] ゲルマン祖語から古アイスランド語までの germ. eu の発展過程については，諸説ある。本稿では主として，Krause（1971）と Ranke/Hofmann（[4]1979）に依っている。Heusler（[7]1967）は，germ. eu は，歯音 , h, m が後続している時のみ a-ウムラウトを受け eo となり，eo は後に ió となった（§49）。germ. eu は，次音節に i, j があると iu になり（§51），古アイスランド語において更に i-ウムラウトによって ý になった（§57）。eo にも iu にもならなかった germ. eu は，iu を経て iú になった（§51, Anm; §53, 3）と仮定している。Noreen（[5]1970）は，germ. eu は，次音節の母音が i, u の時，及び直後に R が続く時 iu になった。その他の音環境では iǫu になった（§56）。iu は i-ウムラウトを受けると ý に，受けていない場合は iú になった（§63, 13; §100）。iǫu は f, g, k, p の前で iú に，その他の場合は ió になった（§101）と仮定している。

[6] 古アイスランド語において，強変化動詞の直説法現在2人称・3人称単数形の語尾は，共に -r である。i-ウムラウトによる ió, iú, ú > ý という変化は，まだテーマ母音が i という形で存在していた文献時代以前の時期に起こったものである。

[7] この他，rióta もここに加えることができるかもしれないが，帰属がはっきりしない。

bióða, brióta, flióta, gióta, hlióta, hnióða, hrióta（herausspringen）, hrióta#（schnarchen）, hrióða（leer machen, ausladen）, liósta, nióta, rióða, sióða, skióta, þióta#, þrióta

語幹が s で終わる動詞の場合，文法的交替により生じた R < z が R-ウムラウトを起こし，アプラウトは ió（ý）– au – ø – ø となったが，giósa, hniósa, hriósa では文法的交替が s の方で平均化され，アプラウトも語幹が ð, t に終わる動詞と同様，ió（ý）– au – u – o となった。friósa と kiósa でも同様の形態が見られるが，古い変化形も残っている。kiósa では，文法的交替は残っているが，アプラウトが語幹が ð, t に終わる動詞と同様となってる形態も見られる。また，friósa も kiósa も，強変化第7種の verba pura への類推で，過去形にそれぞれ frøra, køra という形態を生じている。friósa と kiósa の各語幹形態のヴァリエーションは，次の通りである[8]。

friósa（frýss）– fraus/frøra – frusom/frørom – frosenn/frørenn
kiósa（kýss）– kaus/køra – kusom/kørom/kurom – kosenn/kørenn/korenn

語幹が f, k, p に終わる動詞は，アプラウトが iú（ý）– au – u – o となる。このパターンを示す動詞には，次のものがある。

driúpa, fiúka, kliúfa, kriúpa#, riúfa, riúka, striúka

語幹が g に終わる biúga#[9], fliúga, liúga, smiúga# は，アプラウトが iú（ý）– ó – u – o となる。直説法過去単数形で h < g は，1人称と3人称では消失，2人称では語尾と同化し，-tt となる。これらの動詞の過去単数語幹には，音韻法則に則った形態と並んで，類推的に形成された -aug という形態も存在している。

lúka（schließen）, lúta[10], stúpa, súga, súpa はアオリスト現在形を持ち[11]，lúka, lúta, stúpa, súpa は ú（ý）– au – u – o というアプラウトを行う。súga は過去単数語幹に音韻法則に則った só- という形の他，類推的な saug- を持つ。lúka と súga では，古アイスランド語の末期になると，まれではあるが，類推により現在語幹の幹母音として ú の代わりに iú を示す例が現れ始める。

---

[8] ø は13世紀，時折 e になる。Noreen（[5]1970），§488及び Ranke/Hofmann（[4]1979），§7, Anm. を参照のこと。

[9] biúga は，直説法過去複数形と過去分詞の例しか残されておらず，不定詞が biúga であったのか búga であったのか不明であるが，Cleasby/Vigfusson（1993［[2]1957］）, de Vries（1977）, Zoëga（1981［1910］）に従い，biúga としてあげた。

[10] lúta は過去形において，弱変化第3種の形も示している。

[11] 古ノルウェー語では，dúfa という動詞も見られる。

flýia は，現在語幹の幹母音が常に ý である。この ý は，直説法現在単数形の幹母音が本来の領域を越えて用いられるようになったものである。過去形は，詩語では文法的交替を伴った fló – flugom という形態が見られるものの，ふつうは弱変化である。過去分詞は弱変化形しか残されていない[12]。

tió においては，強変化形は過去分詞の togenn が残されているのみで，意味的にも限定されている（„gezogen“）。これ以外の過去分詞及び過去形は弱変化であり[13]，現在形は特殊な変化を示している[14]。

形容詞化した過去分詞のみが残されていることもある。次の語がそれにあたる。

hokenn, hroðenn（mit Metall überzogen）, loðenn, rotenn（verfault）, snoðenn

幹母音が ú となっているが，fúenn と lúenn もここに加えることができるかもしれない。

Holtzmann の法則により -ww- が -ggv- となった bryggva[15], gyggva, hnǫggva[16], tyggva は強変化第3種へ移行している。

1.3. 古スウェーデン語

ノルド祖語における eu と iu は，古スウェーデン語において平均化により iu に統一され，iu は更に iū へと変化する[17]。iū はその後，子音 + r の後で ȳ へと変化する。iū から ȳ への変化は，時代が下ると単独の r 及び子音 + l の後でも起こってくる[18]。直説法現在2人称・3人称単数形では，i-ウムラウトが起こり，iū, ū が ȳ になった。しかしながら，この現在語幹において生じた iū, ū と ȳ の交替は平均化され，ȳ が排除されていく。もっとも，この ȳ の排除は古スウェーデン語において完全には行われておらず，直説法現在2人称・3人称単数

---

[12] 弱変化過去形には flóþa, flǿþa, flýþa, flúða，過去分詞には flóeþr, flǿeþr, flýeþr, flýþr, flúiðr, flúðr といった形が見られる。なお，flǿþa, flǿeþr から，flǿia という別形が逆成されている。

[13] 過去形には tǿþa, týþa, tióaþa，弱変化過去分詞には tǿþr, týþr, tióaþr という形が見られる。なお，tǿþa, tǿþr から tǿia という別形，týþa, týþr から týia という別形が逆成されている。

[14] tióa は直説法現在形において，tió, týr, týr, tióm, tióeþ, tióa と人称変化する。

[15] bryggva は，過去分詞の bruggenn しか残されていない。古スウェーデン語の bryggia では，4つの語幹すべてを見ることができる。

[16] hnǫggva では，現在語幹の幹母音が変則的である。hnǫggva には hnyggja という別形もある。

[17] Noreen（1904），§ 163, Anm.3を参照のこと。

[18] 同書 § 122, 2及び Wessén（2012［1970］），§ 11, 35頁を参照のこと。古デンマーク語では，iū は l の前にある時，及びその他若干のケースを除き，ȳ になる。強変化動詞第2種で語幹が l に終わるものは無いので，古デンマーク語では，強変化動詞第2種の現在語幹の幹母音は常に ȳ である。Ranke/Hofmann（[4]1979），§ 56, 5及び Skautrup（1968［1944］– 1970），1. bind，§ 30, 249-250頁を参照のこと。

形で幹母音が iū, ū の形態と並んで幹母音が ȳ の形態が残されていることもあり，またいくつかの動詞では，現在語幹の幹母音を iū で統一した形態と ȳ で統一した形態が併存する状態となっている[19]。

germ. au は ō となる。接続法過去形では，i-ウムラウトが起こらず，u が現れる[20]。過去分詞では，本来 -an-, -in- の a, i が脱落した形態において現れていた u が全変化形において用いられるようになる[21]。

古スウェーデン語において，次の動詞は iū – ō – u – u というアプラウトを示している[22]。

biūþa, fiūka, fliūgha（> flȳga）, fliūta（> flȳta）, giūsa[23], giūta, liūta, niūsa, riūta（> rȳta）, kiūsa（bezaubern）, kliūva（> klȳva）, liūgha, liūsta[24], niūta, riūva（> rȳva）, riūka（> rȳka）, riūsa（> rȳsa）, riūþa（> rȳþa）, siūþa, skiūva#, skiūta, smiūgha#, þiūta#

germ. *keusan は，„erwählen“ の意味の時は強変化形が直説法過去複数形 koro- と過去分詞 korin しか残されておらず，他の形態では低地ドイツ語からの借用語で弱変化第2種の kora の変化形が用いられている。なお，古スウェーデン語では，文法的交替はこの koro-, korin にその名残が見られるのみで，„bezaubern“ の意味の kiūsa も含め語幹が s に終わる他の動詞では，排除されてしまっている。

単独の r 及び子音 + l で始まる動詞にあっては，現在語幹の iū は，上述のように ȳ へと変化していく。

次の動詞は，現在語幹の幹母音を iū で統一した形の外，ȳ で統一した別形を持っている。

biūþa/bȳþa, giūta/gȳta, liūta/lȳta, niūta/nȳta, skiūta/skȳta, smiūgha/smȳgha#

また，skiūva# には skūva# という別形が見られる。

次の動詞は，ȳ – ō – u – u というアプラウトを示している（上掲のものを除く）。

---

[19] Noreen（1904），§529, 1及び561, Anm.4を参照のこと

[20] 同書 §564, Anm.6を参照のこと。

[21] 同書 §569, 1を参照のこと。また -an- の痕跡及び -in- による i-ウムラウトを残している例についても同箇所を参照のこと。

[22] この他，niūdha もここに加えることができるかもしれないが，帰属がはっきりしない。

[23] giūsa は，後期古スウェーデン語において gøs という直説法現在単数形が見られるのみであるが，giūsa という不定詞の形を仮定し，ここにあげている。

[24] liūsta の直説法現在形は，単数形の lȳster という形しか残されていないが，liūsta という不定詞の形を仮定し，ここにあげている。

brýta#, drýpa, frýsa, krýpa, -strýka#, þrýta

brýta# には briúta#, brúta#, -strýka# には strúka# という別形が見られる。

germ. *brewwan は，古スウェーデン語では Holtzmann の法則により bryggja となり，強変化第3種へ移行している。

アオリスト現在形を持ち，ū – ǭ – u – u というアプラウトを示す動詞には，次のものがある[25]。

brúta#, búgha#, dúka, lúka（schließen）, lúta, skúva#, slúta, strúka#, súgha, súpa

dúka は，弱変化第2種の変化，lúta は弱変化第1種及び第2種の変化もする。dúka は，後期古スウェーデン語以降に見られるようになる動詞で，中低ドイツ語からの借用語である。

過去分詞のみが形容詞化して残されているものに duvin, luþin, rutin がある。更に，母音の長さの問題はあるが，lúin もこれに加えられるかもしれない。

14世紀半ば頃から，過去複数語幹において過去単数語幹の ǭ が幹母音として用いられている例が見られだす。逆に過去複数語幹から o（この o については下記参照のこと）が過去単数語幹に入り込んでいる例も見られるが，こちらは非常にまれである。

後期古スウェーデン語では，現在語幹の幹母音 iū の i が他の語幹において本来の幹母音の前に挿入された例が見られだす。

後期古スウェーデン語ではまた，短語幹の u が，次音節に i, u, j が無い場合 o になる[26]。この音変化により，過去分詞は変化形により u と o が交替することとなる。この u と o の交替は，初めは音環境に従ったものであったが，平均化により，u も o も本来の音環境以外で用いられるようになり，分布の規則性が失われる。後期古スウェーデン語では更に，短語幹が，短母音の長母音化もしくは語幹末子音の二重子音化により長語幹化する。どちらの変化が起こるかは，語幹末子音が何かにより異なっており，また方言によっても異なっている[27]。これらの変化により，後期古スウェーデン語では過去分詞の形態に様々な別形が生じることになる。また，過去分詞の o は，一部過去複数語幹にも入り込んでいく。

---

[25] この他にも，dúva をここに加えることができるかもしれない。dúva は中低ドイツ語からの借用語である可能性がある。

[26] Wessén（2012［1970］），§67-68を参照のこと。

[27] 同書 §78を参照のこと。

1.4. 古高ドイツ語

古高ドイツ語では germ. eu は eo と iu に割れるが，どのような音環境の時にどちらの母音になるかが方言により異なっている。中部ドイツ語では，germ. eu は，次音節に前舌高母音，後舌高母音以外の母音がある時（j が先行している時を除く）は eo に，前舌高母音，後舌高母音，あるいは j がある時は iu になったが，上部ドイツ語では，germ. eu の eo への変化は，次音節の母音が非高母音で j も無いというだけでなく，後続子音が歯音または h < germ. h の時に限られ，次音節の母音が非高母音で j も無いという音環境でも，後続子音が唇音または軟口蓋音の時は germ. eu は iu になった。以下においては，中部ドイツ語の母音分布を基に論を進めていく。eo は，ごく初期の段階ではまだ eo のまま現れているが，じきに io へと変化する。標準階梯の現在語幹から形成される諸形態では，io と iu の交替が生じるが，直説法現在1人称・2人称・3人称単数形と命令法2人称単数形では iu[28]，その他の形態では io である。アオリスト現在形を持つ動詞では，直説法現在2人称・3人称単数形で i-ウムラウトを受け ū が ū̂ になるが，これは綴りには現れない。

germ. au は，唇音及び軟口蓋音の前では ou，歯音及び h < germ. h の前では ō になる。直説法過去2人称単数形及び接続法過去形では u に対し i-ウムラウトが起こるが，綴り上これは現れていない。

過去分詞は接尾辞が -an- で，幹母音は，語幹が w に終わる動詞を除き（下記参照のこと），a-ウムラウトを受けた o である。

以上の音変化の結果，標準階梯の現在語幹を持ち語幹が唇音または軟口蓋音に終わる動詞のアプラウトは io（iu）– ou – u – o[29]（かっこ内は直説法現在単数形の幹母音）となる。このアプラウトを示す動詞は，次の通りである。

biogan#, triogan, triofan, fliogan, hiofan, klioban, kriohhan, liogan, liohhan#, riohhan, skioban#, sliofan#, smiogan#, stioban

hiofan は現在形の例しか残されていないが，上部ドイツ語では語幹末子音が p < b < germ. ƀ で，文法的交替の平均化が見られる。

標準階梯の現在語幹を持ち語幹が歯音もしくは h < germ. h で終わる動詞のアプラウトは，io（iu）– ō – u – o となる。このパターンのアプラウトを示す動詞は，次の通りである。

biotan, briodan, fliohan, flioʒan, friosan, gioʒan, grioʒan（zerreiben），(h)lioʒan,

[28] 命令法2人称単数形の iu は，直説法への類推によるものである。古ザクセン語の命令法2人称単数形の iu も同様である。Krahe（[7]1969b），§79を参照のこと。

[29] 上部ドイツ語では，現在語幹の幹母音は常に iu である。

-(h)niotan, (h)niosan, (h)riosan, kiosan, -liotan, -liosan, nioʒan, rioʒan, siodan, skioʒan, slioʒan#, ziohan, dioʒan#, -drioʒan

friosan, kiosan, -liosan, siodan, ziohan においては，文法的交替が見られる。fliohan においては，fliogan との混同を避けるため，文法的交替が排除されている。

標準階梯の現在語幹を持ち語幹が w に終わる動詞の場合，現在語幹を持つすべての形態で幹母音は iu である[30]。また，過去複数語幹と過去分詞の語幹も変則的で，幹母音はともに ū である[31]。よってアプラウトのパターンは iu – ou – ū – ū となる。該当するのは，bliuwan, (h)niuwan, (h)riuwan, kiuwan の4語である。

アオリスト現在形を持ち語幹が唇音または軟口蓋音に終わる動詞のアプラウトは，ū – ou – u – o となる。次の5語がこれに該当する。

brūhhan, tūhhan, lūhhan (schließen), sūgan, sūfan

brūhhan は，過去分詞において，弱変化第1種に倣った形態も示している。

アオリスト現在形を持ち語幹が歯音に終わる動詞は，アプラウトが ū – ō – u – o となる。このアプラウトを示す動詞は，(h)rūzan# (schnarchen) のみである[32]。

1.5. 古ザクセン語

古ザクセン語でも germ. eu は，次音節に前舌・後舌高母音以外の母音がある時（j が先行している時を除く）は eo，前舌・後舌高母音あるいは j がある時は iu になる。ただし，後ろに w が続き，その後の母音が非高母音の時は eu のまま保持される。eo は io, ea, ia, ie といった様々な形に変化し，最終的には開口度の低い ē になっていく。本稿では io で代表させる。

標準階梯の現在語幹を持ち語幹が w 以外で終わる動詞の場合，直説法現在形において単数形はどの人称形も幹母音が iu，複数形は幹母音が io となる。命令法2人称単数形の幹母音は，iu が基本だが，io の例も見られる。

アオリスト現在形を持つ動詞では，古高ドイツ語同様，直説法現在2人称・3人称単数形で i-ウムラウトを受け ū が ū になるが，やはりこれは綴りには現れ

[30] ë は ww の前で i になったため，ë-ww- は iu-w- となった。この変化については，Braune/Reiffenstein (2004)，§30, Anm.2を参照のこと。

[31] Seebold (1970), 120-121頁では，このタイプの動詞の過去複数語幹と過去分詞の幹母音の長短は不明とされている。

[32] 過去複数語幹を持った形態，及び過去分詞の例は残されていない。過去単数語幹を持った形態も，直説法3人称単数形の raoz が1例残されているのみであるが，この語形は au から ō へ変化する中間段階の ao を伴っている。

ない。

germ. au は開口度の高い ō になる。古高ドイツ語と同様，直説法過去2人称単数形及び接続法過去形では u に対し i-ウムラウトが起こるが，やはり綴り上それは表記されていない。過去分詞は接尾辞が -an- で，幹母音は，語幹が w に終わる動詞を除き（下記参照のこと）a-ウムラウトを受けた o である。

標準階梯の現在語幹を持ち語幹が w 以外で終わる動詞のアプラウトは io（iu）– ō – u – o（かっこ内は直説法現在単数形の幹母音）となる。具体的にあげると，次の動詞である。

biodan, -driogan, driopan, driosan, fliohan, fliotan, giotan, griotan（weinen），hioþan, hliotan, kiosan, klioþan, liodan, liogan, -liosan, niotan, skiotan, tiohan, -thriotan

kiosan, -liosan, tiohan においては，文法的交替が見られる[33]。tiohan では接続法過去複数形において，tugin と並んで文法的交替が平均化された tuhin という形態も見られる。

標準階梯の現在語幹を持ち語幹が w に終わる動詞は，bleuwan, breuwan, hreuwan の3語しかなく，どれも用例が極めて少ない。bleuwan は直説法現在3人称単数形の ūtbliuwid，breuwan は過去分詞の gibreuuan，hreuwan は不定詞の hreuuan, hreuuuan と直説法過去3人称単数形の hrau が見られるのみである。

アオリスト現在形を持つ動詞は，ū – ō – u – o というアプラウトになる。該当するのは次の動詞である。

brūkan, būgan#, hrūtan#（schnarchen）, lūkan（schließen）, slūtan#, sūgan, -sprūtan

1.6. 古英語

古英語期以前及び古英語期に入ってから起こった母音の変化には様々な方言差が見られる。本稿では，母音に関する記述は専ら西サクソン方言の母音について行い，他の方言については，註で触れるに留めることとする。

germ. eu は，次音節の前舌高母音及び j の前で iu になる。その後 eu は ēo に，iu は īo に変化する[34]。更にその後，īo は i-ウムラウトにより īe へと変化する[35]。

---

[33] driosan は直説法現在複数形，fliohan は直説法過去3人称単数形の例しか残されていない。

[34] この後の ēo と īo の発展は，方言により異なっている。ノーサンブリア方言では，ēo と īo は，本来の分布が保持される。マーシャル方言と西サクソン方言では，ēo も īo も本来の使用領域を越え，ēo が本来 īo が現れるべきところでも，īo が本来 ēo が現れるべきところでも用いられるようになるが，ēo で統一する方向に向かう。ケント方言では，ēo と īo は īo に統一される。Brunner（1965），§38，§78及び Campbell（2003［[3]1968］），§293-§297を参照のこと。

[35] ēo/īo が i-ウムラウトにより変音するのは西サクソン方言のみで，他の方言では，次音節に i, j

ū は i-ウムラウトを受けると ȳ になる。これらの変化により，現在語幹から形成される諸形態の内，直説法現在2人称・3人称単数形では īe, ȳ が[36]，その他の形態では ēo, ū が現れることになる。

germ. au は ēa になる。直説法過去2人称単数形と接続法過去形では，i-ウムラウトが排除され，常に u が現れる[37]。過去分詞は，接尾辞が -en- < -æn- < -an- で，幹母音は a-ウムラウトを受けた o である。

標準階梯の現在語幹を持つ動詞のアプラウトは ēo（īe）– ēa – u – o（かっこ内は直説法現在2人称・3人称単数形の幹母音）である[38]。このアプラウトを示す動詞は，次の通りである[39]。

> bēodan, brēotan, -brēoþan, brēowan, drēogan, drēopan, drēosan, flēogan, flēon, flēotan, frēosan, ġēopan, ġēotan, grēotan（weinen）, hlēotan, -hnēopan, hrēodan, hrēosan, hrēowan, ċēosan, ċēowan, clēofan, cnēodan, crēopan#, lēodan, lēogan, -lēosan, -nēopan, nēotan, rēodan, rēofan, rēocan, rēotan, sēoþan, scēotan[40], smēocan, snēowan, tēon（ziehen）, þēotan#, þrēotan

ここに更に lēoran を加えることができるかもしれない。rēocan は，時代が下ると，弱変化第1種の過去形が見られるようになる。þēotan はアオリスト現在形が併存している（下記参照のこと）。

germ. h は母音間で脱落する。語幹末が germ. h で終わっていた動詞は，母音

があったとしても，そのまま保持される。Brunner（1965），§ 107; Campbell（2003［[3]1968］），§ 201; Lehnert（1978），§ 31, 8を参照のこと。

[36] 直説法現在2人称・3人称単数形において，テーマ母音の i は，アングリア方言では e に弱化し，西サクソン方言とケント方言ではたいてい脱落する。直説法現在2人称・3人称単数形における i-ウムラウトは，テーマ母音がまだ i という形で残っていた時期に起こったものである。直説法現在2人称・3人称単数形の i-ウムラウトについては，方言差が見られる。ēo/īo の i-ウムラウトについては，註35で述べた通りである。ū > ȳ という i-ウムラウトは，西サクソン方言とケント方言では保持されるが，アングリア方言では排除される。Brunner（1965），§ 371; Campbell（2003［[3]1968］），§ 733; Lehnert（1978），§ 76a, 101頁を参照のこと。

[37] Brunner（1965），§ 377; Campbell（2003［[3]1968］），§ 736,（m）; Lehnert（1978），§ 76a, 103-104頁を参照のこと。

[38] 標準階梯の現在語幹を持つ動詞とアオリスト現在形を持つ動詞の双方に関連することだが，アングリア方言では，c, g, h の前で ēo, īo, ēa はそれぞれ ē, ī, ē < ǣ となる。Brunner（1965），§ 119; Campbell（2003［[3]1968］），§ 222; Lehnert（1978），§ 35, 62-63頁を参照のこと。アングリア方言の内，ノーサンブリア方言では、過去単数語幹が、本来過去複数語幹を用いるべき形態に入り込んでいる例が見られる。Brunner（1965），§ 384, Anm.7, § 385, Anm.4; Campbell（2003［[3]1968］），§ 740を参照のこと。

[39] cnēodan と snēowan には，それぞれ強変化第7種の cnōdan, snōwan が併存している。

[40] sc- で始まる動詞では、sc- と非前舌母音の間に渡り音 ĕ が生じることがある。これには scēotan の他、下記の scūfan が該当する。Brunner（1965），§ 92, 2, a）u. b），§ 384, 2, Anm.1, § 385, Anm.2; Campbell（2003［[3]1968］），§ 180-181, § 740; Lehnert（1978），§ 30, 2を参照のこと。

で始まる語尾の前で h が脱落し，幹母音と語尾の母音の約音が起こる[41]。本来の強変化動詞第2種で該当するのは flēon と tēon（ziehen）の2語である。約音により生じる母音は，他の動詞の幹母音と同一である。従って，アプラウトのパターンは変わらない。強変化第1種の約音動詞と強変化第2種の約音動詞は，現在形が同形となるが，これが誘因となり，西サクソン方言では強変化第1種の約音動詞 lēon, sēon, tēon（zeihen）, þēon, wrēon が強変化第2種へ移行している。

drēosan, flēon, frēosan, hrēosan, ċēosan, -lēosan, tēon（ziehen），及び強変化第1種から移行してきた lēon, sēon, tēon（zeihen）, þēon, wrēon では，文法的交替が見られる。約音動詞の内，flēon, lēon, tēon（zeihen）[42], tēon（ziehen）, þēon, wrēon における文法的交替は 0/h～g，sēon における文法的交替は0/h～w である。-brēoþan では平均化が起こり，文法的交替が排除されている。

flēogan と flēon は，無声子音の前での g の無声化（g > h）により直説法現在2人称・3人称単数形が，文法的交替により過去複数語幹から形成される諸形態と過去分詞が同形となるため，古英語後期になると混同されるようになってくる。

germ. g あるいは germ. k で始まり直後に幹母音が続く動詞の場合，過去複数語幹と過去分詞では germ. g が g，germ. k が c として現れるが，現在語幹と過去単数語幹では口蓋化と germ. k の場合は更に歯擦音化により，germ. g が ġ, germ. k が ċ となる。該当するのは，ġēopan, ġēotan, ċēosan, ċēowan の4語である。

アオリスト現在形を持つ動詞のアプラウトは，ū（ȳ）– ēa – u – o である。このアプラウトを示す動詞には，次のものがある。

> brūcan, būgan#, dūfan, hrūtan#（schnarchen）, crūdan, lūcan（schließen）, lūcan#（jäten）, lūtan, scūfan#, slūpan#, smūgan#, sprūtan, strūdan, sūcan/sūgan, sūpan, þūtan#

ここに更に scūdan も加えることができるかもしれない。sūpan では，ġesūpedon という弱変化第2種の過去複数形も見られる。

1.7. 古フリジア語

フリジア語において germ. eu は，古フリジア語以前の時期に，次音節に前舌高母音あるいは j があると iu になり，この iu は古フリジア語では iū または iō となる。この変化を受けなかった germ. eu は，w が後続している場合を除き，

[41] 直説法現在2人称・3人称単数形において，西サクソン方言とケント方言では語末音の h が保持されるが（ケント方言では脱落することもある），アングリア方言では脱落する。Brunner（1965），§374を参照のこと。

[42] tēon（zeihen）の過去分詞には，-in- という接尾辞による i-ウムラウトを示す tygen という形態が残されている。

古フリジア語で iā になる。

アオリスト現在形を持つ動詞の直説法現在2人称・3人称単数形では，i-ウムラウトが起こったものと考えられるが，これは排除されている。

古フリジア語では直説法現在2人称・3人称単数形のテーマ母音の i が弱化し e となるが，この e は大抵脱落する。テーマ母音 e の脱落した直説法現在2人称・3人称単数形では語末に子音が重なることになるが，これにより iū, iō, ū の iu, io, u への短母音化が起こる。

germ. au は，古フリジア語では ā になる。古フリジア語末期になると，iā におけるものも含め，ā は開口度の高い ē に変化する。

過去分詞の接尾辞は -en- < -in- であり、そのため幹母音は i-ウムラウトを受けた e である。過去複数語幹の幹母音も e である。後者の e については，過去分詞の幹母音が類推的に入り込んだものとする説と，直説法過去2人称単数形及び接続法過去形の幹母音が一般化したという説がある[43]。

古フリジア語において，iā (iu, io) – ā – e – e(かっこ内は直説法現在2人称・3人称単数形の幹母音)というアプラウトを示す動詞には，次のものがある。

biāda, driāpa, fliāta, iāta, tziāsa/kiāsa, kriāpa#, -liāsa, niāta, riāka, siātha, skiāta, wiāka

kriāpa はアオリスト現在形が併存している（下記参照のこと）。

tziāsa, -liāsa, siātha では，文法的交替が見られる。ただし，古西フリジア語では，有声の th が d へと変化するため，siātha における文法的交替は排除されることになる。なお，古西フリジア語では，有声の th が d へ変化した後，母音間の d は脱落するようになる。

wiāka は，強変化第1種の wīka から形成された動詞である。語幹が k で終わっている場合，直説法現在3人称単数形においてテーマ母音の脱落した -t(h) という語尾が付くと，しばしば k は ch へと変化した。cht の前で i は iu になるので，wīka からは wiucht という直説法現在3人称単数形が形成されることになるが，この wiucht における iu という幹母音は，強変化第2種の直説法現在3人称単数形のそれと同じである。そのため wiucht から逆成されたのが wiāka である。

germ. k は，語頭にあり直後に幹母音が続く時現在語幹において，語幹末にある時過去分詞において口蓋化・歯擦音化し tz になる。この tz は，類推により再び k に引き戻されることがある。たとえば，tziāsa では，この k への引き戻しにより kiāsa という別形が生じている。

[43] 前者については Siebs (1901)，§136及び Bremmer Jr. (2009)，§132を，後者については van Helten (1890)，§269を参照のこと。

germ. g も口蓋化により j に変化する[44]。古フリジア語の強変化動詞第2種では，germ. g が語頭にあり直後に幹母音が続く例は存在していないので，問題となるのは，germ. g が語幹末にある語の過去分詞のみである。この場合，germ. g が j になることで -eji- という音連続が生じるが，これは ei へと変化する。よって，語幹が g に終わる動詞のアプラウトは，iā（iu, io）– ā – e – ei となる。古フリジア語で語幹が g で終わる強変化動詞第2種は，-driāga, fliāga, -liāga である（fliāga に関しては，下記を参照のこと）。なお，この語幹が g で終わる動詞の -ein という形の過去分詞に対して，類推的に形成された -egen という形の過去分詞が併存していることもある。

語幹が germ. h で終わる動詞の場合，母音間で germ. h が脱落し約音が起こる。fliā と tiā がこれに当たる。現在語幹において iā と語尾の母音が約音し生じる母音は iā であり，約音前の幹母音と同一である。fliā も tiā も文法的交替を行う（germ. h～germ. g）。そのため，過去分詞の形態は，語幹が g に終わる動詞と同様，-ein または -egen となる。

fliāga と fliā は，無声子音の前及び語末での g の無声化（g > h）により直説法現在2人称・3人称単数形，命令法2人称単数形，直説法過去1人称・3人称単数形が，文法的交替により過去複数語幹から形成される諸形態，過去分詞が同形となった。このことが引き金となり，両者の融合が起こり，fliā が fliāga を吸収することになる。fliāga と fliā が形態上区別されていたことを示す例が残されていないため，古フリジア語でこの過程がどの程度進んでいたか不明であるが，本稿では *fleugan は fliāga という形であげている（上記参照のこと）。

語幹が w に終わる動詞には br(i)ouwa と（h)riouwa がある。br(i)ouwa は，現在語幹を持った形態と過去分詞しか残されておらず，幹母音は前者が（i)ou，後者が ou である。(h)riouwa は，現在語幹を持った形態しか残されておらず，幹母音は iou または iō である[45]。

アオリスト現在形を持つ動詞の場合，アプラウトは ū（u）– ā – e – e となる。古フリジア語では，次の動詞が見られる。

brūka, dūka, -glūpa, hrūta# （röcheln）, krūpa#, lūka（schließen）, lūka# （ziehen）, skūva#, -slūta#, sprūta

語幹が k に終わる動詞の過去分詞における k の口蓋化・歯擦音化については，上記を参照のこと。

（続く）

[44] -gg- < - gg-, -ng- < -ng では，g が dz に口蓋化・歯擦音化するが，この変化は強変化動詞第2種の語幹形成には関わってこない。

[45] br(i)ouwa も（h)riouwa も，古西フリジア語の形しか残されていない。

参考文献

（『ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史的変遷（1）』で用いたもののみ。）

Bosworth, Joseph and T. Northcote Toller [11]1991: An Anglo-Saxon dictionary, Oxford University Press.

Boutkan, Dirk and Sjoerd Michiel Siebinga 2005: Old Frisian etymological dictionary, Leiden.

Braune, Wilhelm [15]2004: Althochdeutsche Grammatik 1. Laut- und Formenlehre, bearb. von Ingo Reiffenstein, Tübingen.

- [20]2004: Gotische Grammatik, neu bearbeitet von Frank Heidermanns, Tübingen.

Bremmer Jr., Rolf H. 2009: An introduction to Old Frisian, Amdterdam/Philadelphia.

Brunner, Karl [3]1965: Altenglische Grammatik, Tübingen.

Campbell, Alistair 2003 [[3]1968]: Old English grammar, Oxford.

Cleasby, Richard and Gudbrand Vigfusson 1993 [[2]1957]: An Icelandic-English dictionary, second edition with a supplement by William A. Craigie, Oxford.

Cordes, Gerhard 1973: Altniederdeutsches Elementarbuch, mit einem Kapitel „Syntaktisches“ von Ferdinand Holthausen, Heidelberg.

Cordes, Gerhard u. Dieter Möhn (Hrg.) 1983: Handbuch zur niederdeutschen Sprach- und Literaturwissenschaft, Berlin.

Feist, Sigmund [3]1939: Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache, mit Einschluß des Krimgotischen und sonstiger zerstreuter Überreste des Gotischen, Leiden.

Fulk, R.D. 2018: A comparative grammar of the early Germanic languages, Amsterdam/Philadelphia.

Gallée, Johan Hendrik [3]1993: Altsächsische Grammatik, Tübingen.

Goossens, Jan (Hrg.) 1983: Niederdeutsch, Sprache und Literatur, eine Einführung, 2., verbesserte und um einen bibliographischen Nachtrag erweiterte Auflage, Neumünster.

Grosse, Rudolf (Hrg.) 2007: Althochdeutsches Wörterbuch, Reprint der Bände I-IV, Berlin.

Gutenbrunner, Siegfried 1951: Historische Laut- und Formenlehre des Altisländischen, Heidelberg.

Haugen, Einar 1982: Scandinavian language structures, a comparative historical survey, Tübingen.

van Halten, Willem Lodewijk 1890: Altostfriesische Grammatik, Leeuwarden.

Heusler, Andreas [7]1967: Altisländisches Elementarbuch, Heidelberg.

Hirt, Hermann 1931: Handbuch des Urgermanischen, Teil I, Laut- und Akzentlehre,

Heidelberg.
Hirt, Hermann 1932: Handbuch des Urgermanischen, Teil II, Stammbildungs- und Flexionslehre, Heidelberg.
Hofmann, Dietrich u. Anne Tjerk Popkema 2008: Altfriesisches Handwörterbuch, unter Mitwirkung von Gisela Hofmann, Heidelberg.
Holthausen, Ferdinand [3]1974: Altengliches etymologisches Wörterbuch, Heidelberg.
Holthausen, Ferdinand u. Dietrich Hofmann 1985: Altfriesisches Wörterbuch, zweite, verbesserte Auflage, Heidelberg.
Kluge, Friedrich [24]2002: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache, bearbeitet von Elmar Seebold, Berlin/New York.
Köbler, Gerhard 1989: Gotisches Wörterbuch, Leiden.
- 1993: Wörterbuch des althochdeutschen Sprachschatzes, Paderborn.
Krahe, Hans [2]1967: Historische Laut- und Formenlehre des Gotischen, bearbeitet von Elmar Seebold, Heidelberg.
- [7]1969a: Germanische Sprachwissenschaft I, bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
- [7]1969b: Germanische Sprachwissenschaft II, bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
Krause, Wolfgang [3]1968: Handbuch des Gotischen, München.
- 1971: Die Sprache der urnordischen Runeninschriften, Heidelberg.
Kuryłowicz, Jerzy 1969: Les verbes germaniques du type *lūkan*, in: Mélanges Fourquet, Paris/München.
Lehmann, Winfred P. 1986: A Gothic etymological dictionary, Leiden.
Mitchell, Bruce and Fred C. Robinson 2001: A guide to Old English, sixth edition, Blackwell Publishing.
Mossé, Fernand 1969 [[2]1956]: Manuel de la langue gotique, Paris.
Noreen, Adolf 1904: Altnordische Grammatik II, Altschwedische Grammatik, mit Einschluß des Altgutnischen, Halle.
- [5]1970: Altnordische Grammatik I, Tübingen.
Pfeifer, Wolfgang et al. 1989: Etymologisches Wörterbuch des Deutschen, Berlin.
Prokosch, Eduard 1939: A comparative Germanic grammar, Linguistic society of America.
Ranke, Friedrich u. Dietrich Hofmann [4]1979: Altnordisches Elementarbuch, Berlin/New York.
Ringe, Don 2006: From Proto-Indo-European to Proto-Germanic (A linguistic history of English, volume I), Oxford University Press.
Ringe, Don and Ann Taylor 2014: The development of Old English (A linguistic history of English, volume II), Oxford University Press.
Schützeichel, Rudolf 2006: Althochdeutsches Wörterbuch, 6., Auflage, überarbeitet und

um die Glossen erweitert, Tübingen.
Seebold, Elmar 1970: Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben, The Hague.
Sehrt, Edward H. 1966: Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis, 2. durchgesehene Auflage, Göttingen.
Siebs, Theodor 1901: Geschichte der friesischen Sprache, in: Grundriß der germanischen Philologie, herausgegeben von Hermann Paul, Bd.1, 2. Auflage, Straßburg.
Sjölin, Bo 1969: Einführung in das Friesische, Stuttgart.
Skautrup, Peter 1968 [1944]-1970: Det danske sprogs historie, 5 bind, Gyldendalske boghandel, Nordisk forlag.
Splett, Jochen 1993: Althochdeutsches Wörterbuch, 2 Bde., Berlin/New York.
Streitberg, Wilhelm [4]1974: Urgermanische Grammatik, Heidelberg.
- 2000a: Die gotische Bibel, Band 1, der gotische Text und seine griechische Vorlage, 7. Auflage, Heidelberg.
- 2000b: Die gotische Bibel, Band 2, Gotisch-Griechisch-Deutsches Wörterbuch, 6. Auflage, Heidelberg.
de Tollenaere, Felicien and Randall L. Jones 1976: Word-indices and word-lists to the Gothic bible and minor fragments, Leiden.
de Vries, Jan 1977: Altnordisches etymologisches Wörterbuch, Leiden.
Wessén, Elias 2012 [1968]: Die nordischen Sprachen, Berlin.
- 2012 [1970]: Schwedische Sprachgeschichte, Band 1, Berlin.
Wright, Joseph 1981 [1910]: Grammar of the Gothic language, second edition with a supplement to the grammar by O. L. Sayce, Oxford University Press.
Wright, Joseph and Elizabeth Mary Wright 1984 [1925]: Old English grammar, third edition, Oxford University Press.
Zoëga, Geir T. 1981 [1910]: A concise dictionary of Old Icelandic, Oxford.